

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：32501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730477

研究課題名(和文)精神障がい者家族の支援に関する基礎研究 - 社会的支援への移行に向けての課題 -

研究課題名(英文)Basic research on family support for the mentally handicapped: the challenge of transitioning to social support

研究代表者

伊藤 千尋 (ITO, CHIHIRO)

淑徳大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：50458410

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、精神障害者本人だけでなく家族にも支援が必要とされる根拠を見いだすことを目的に、統合失調症の子どもをもつ母親を対象にインタビュー調査を実施した。これらの根拠をもとに、具体的な家族支援施策についての知見を得るため、Meriden Family Programme(英国NHS内の家族支援技術の研修機関)への視察を行った。結果、母親は直接的なケアにとどまらず、本人から強い影響を受けながら生活していること、こうした影響が長年積み重なることで、母親と本人が「分かちがたい関係」に陥っていることが示唆された。本人も含めた家族全体に働きかける支援として、メリデン版訪問家族支援の有効性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：To establish a basis for the necessity of supporting not only the mentally handicapped but also their families, this study was conducted through interviews with mothers of schizophrenic children. Based on this, observations on the Meriden Family Programme were carried out in order to obtain concrete knowledge about family-support policies. The results of this study suggest that 1) mothers are not limited to providing direct care to their schizophrenic children, but their lifestyles are also strongly influenced by them, and 2) the long-term effect of this influence creates an "inseparable relationship" between the mother and child. Meriden-style home-visit support that targets the entire family, including the handicapped child, has been demonstrated to be effective.

研究分野：精神保健福祉

キーワード：精神障害者 家族支援

1. 研究開始当初の背景

近年、「介護」が身近な問題として認識されるようになり、家族介護から社会的介護へと転換が迫られている。しかし残念ながら、精神保健福祉の領域では、今なお「家族が面倒を見るべき」という意識が根強くあり、家族は精神障害者の地域生活を支え続けている。

研究者は 2005 年より精神障害者家族会での相談活動にかかわっているが、そこに寄せられる相談においても、本人への支援を求めて奔走したり、他者から支援を受けることをあきらめ、ひとりで本人の支援に向き合い続けている家族の姿を目の当たりにする。精神疾患を抱えているか否かという点では家族は当事者ではないが、支援を担い続けることで本人との心理的・物理的距離が近づいていくことは容易に想像できる。

こうした状況は、家族に過大な負担を強いるだけでなく、精神障害者本人の側からみても、家族が支援を担えない状況になったとき、これまでの生活を維持していくことに困難が生じるということでもある。本人が安心して、精神科治療や地域生活を継続していくためにも、家族に依存しない施策やシステムを早急に検討していくことが求められている。

2. 研究の目的

本研究では、精神障害者家族の生活実態を整理することで、本人だけでなく、家族にも支援が必要とされる根拠を見いだすこと(課題1)、これら根拠をもとに、家族が包括的に支援されるための具体的な家族支援施策について検討すること(課題2)を目的としている。

3. 研究の方法

(1) 課題1: 家族へのインタビュー調査

調査時期

2013年8月～2016年3月

調査対象者

これまでの全国調査から精神障害者家族会に所属する家族の特徴を概観すると、本人との続柄は「親」が多く、回答者の性別をみると特に母親の占める割合が多い、本人の病名は「統合失調症」が多い、本人と同居している家族が多いことが挙げられる。

本調査では、これまでの全国調査のデータ属性(続柄:母親、病名:統合失調症、同居)に該当する15名(パイロットスタディ1名、本調査14名)を選定した。

. 家族の特徴

対象者14名の年代は40代から80代までで、60代以上が10名を占めている。続柄は母親で、子どもと同居し、家族会に所属している。

. 子どもの特徴

子ども14名の年代は20代から50代までで、30代から40代までが10名を占めている。性別は男性9名、女性5名である。病名は全員が統合失調症であり、診断から現在までの経過年数は3年から34年である。

データ収集

パイロットスタディとして、馴染みのある家族に事前インタビューを実施し、研究者のインタビュアーとしての姿勢をチェックしてもらい、対象者が安心して話せるような配慮や工夫について助言を受けた。

本調査では、母親に「本人が発病してから現在までの自身の体験」を自由に語ってもらい、研究者は内容の確認や自身の語りへの促しに留めるように心がけた。インタビュー時間はそれぞれ異なり、90分から3時間に及んだ。

データ分析

データの分析は、佐藤(2008)の事例・コードマトリックスを参考にし、逐語録化したインタビューデータから意味内容別に文章をセグメント化し「コード」をつけ、文章全体の文脈に立ち返りながら、「コード」から

「カテゴリー」を生成し、コードとカテゴリー、カテゴリー同士の解釈の可能性を確認する作業を繰り返すことでデータ解釈の厳密性と妥当性の担保に努めた。カテゴリー化にあたっては、第三者からのスーパービジョンを受けた。

倫理的配慮

本調査の実施に際し、所属研究機関の研究倫理委員会の承認を得た。調査は対象者が安心して話ができる場所（対象者の自宅もしくは個室）で実施し、次の点に配慮した。インタビュー前に、研究趣旨の説明、調査参加は自由であること、秘密保持、個人情報保護、いつでも中止できること、研究結果のフィードバック方法を文書と口頭で確認した。また、希望に応じてインタビュー終了後に気持ちの整理をつけるための時間を設定した。さらに、データの抜粋にあたって、個人が特定できないように配慮した。

(2) 課題2：Meriden Family Programme への視察

日程

2013年3月18日～3月22日

内容

Meriden Family Programme は、英国バーミンガムにある NHS（国民保健サービス）の精神保健部門で 1998 年より活動している精神障害者の家族支援技術の研修機関である。ここで開発されたのが Family Work と呼ばれる行動療法的家族支援（Behavioral Family Therapy）である。Family Work は、英国、米国、カナダなど多くの国でその効果が実証されており、精神疾患の治療ガイドラインにも指針が示されているものである。研修機関のスタッフには、当事者である家族も雇用され、専門家も家族も対等な立場でこのプログラムの普及に努めている姿勢が打ち出されている（伊藤, 2015）。

本研究では具体的な家族支援施策につい

ての知見を得ることを目的に、Meriden Family Programme への視察を行った。

4. 研究成果

(1) 課題1：家族へのインタビュー調査

母親の語りは主に「子ども（本人）に関する語り」、フォーマルなサポート源である「主治医や専門職等に関する語り」、インフォーマルなサポート源である「家族や友人に関する語り」、また全員が精神障害者家族会に所属しているため、「家族会に関する語り」が共通して見られた。

本研究の結果、母親は直接的なケアにとどまらず、本人から強い影響を受けながら生活していることが示唆された。母親が本人から受ける影響については、「責められる」「おびやかされる」「緊張させられる」「振りまわされる」「抑圧される」「肯定的な影響」の6つのカテゴリーから構成された。（表1）

表1 母親が本人から受ける影響

カテゴリー	コード
責められる	強制医療を責められる
	過去の対応を責められる
	日々の対応を責められる
おびやかされる	暴力におびやかされる
	トラブルにおびやかされる
	自殺におびやかされる
緊張させられる	不安にさせられる
	張りつめる
振りまわされる	振りまわされる(行動面)
	振りまわされる(精神面)
抑圧される	言葉を封じられる
	自由を奪われる
肯定的な影響	安堵させられる

これまでの家族研究では、専ら本人を主体とし、家族が本人にどのような影響を与えているのか、家族から本人という一方向的な視点で捉えられてきた。

しかし、本人と家族は相互に影響しあっており、母親も本人から強い影響を受けながら

生活していることが明らかになった。また、母親は為す術もなく本人から影響を受けているだけではなく、最大限に努力しながら対応しており、こうした対応が積み重なることで、母親と本人が「分かちがたい関係」に陥っていることが示唆された。

この「分かちがたい関係」においては、本人と家族を個別に捉える視点だけでは効果的な家族支援につながらない可能性がある。個別支援を原則としつつも、本人も含めた家族全体を視野に入れた支援も求められるだろう。

本研究では「子ども(本人)に関する語り」に焦点を当てて分析を行ったが、今後は母親がどのようなソーシャルサポートを得てきたのかに着目し、母親自身のソーシャルサポートの現状と課題を明らかにしていきたい。

(2) 課題2: Meriden Family Programme への視察

Meriden Family Programme での視察内容は、Family Work の概要(理念、エビデンス)の説明、Family Work の技術(支援内容とプロセス)とトレーニング(研修プログラム、研修方法)の説明、Family Work を受けた家族へのインタビューと多岐にわたるものであった。

佐藤(2016)によると、Family Work の目的は、今ある課題を家族が解決し、ストレスへの対処能力を高めることで、家族内のストレスを軽減し再発率を減少する、将来、家族が自分たちの力で困難を乗り越えていくためのより効果的な問題解決や目標達成のスキル習得の機会を提供する、精神障害をもつ人を含めた家族が自立し、それぞれの生活を生きることを支援する。その内容は、専門職1名ないしは2名の訪問により、通常10から14回のセッションが提供され、関係づくり、アセスメント、精神疾患や治療などの情報共有、コミュニケーションス

キルトレーニング、問題解決と目標達成、再発の初期兆候の認識と再発予防計画、危機介入、その他の技能習得、について家族同士のポジティブコミュニケーション技術の獲得をベースに介入される。

精神障害者家族会の全国組織である公益社団法人全国精神保健福祉会(以下、みんなねっと)は、全国調査(2010)の結果から、本人・家族のもとに届けられる訪問型の支援・治療サービスの実現、24時間・365日の相談支援体制の実現、本人の希望にそった個別支援体制の確立、利用者中心の医療の実現、家族に対して適切な情報提供がされること、家族自身の身体的・精神的健康の保障、家族自身の就労機会および経済的基盤の保障の7つの提言をまとめている。

Family Work は、「訪問による」「本人も含めた家族一人ひとりへの支援」技術であり、これらの提言に応えるものとして大きな可能性をもっている。さらに、本人・家族・専門職の三者の協働を重視し、家族がいずれ自分たちで問題解決する力を身につけることを目的にしており、家族の最大限の努力を活かすことができることも特筆すべき点である。

“Nothing About Us Without Us”(私たちのことを私たち抜きに決めないで)は障害者権利条約の批准において盛んに使われてきた言葉である。この技術の日本への導入を目指し、2013年度から、みんなねっとと共に「英国メリデン版訪問家族支援プロジェクト」に取り組むこととなった。

今後、日本で Family Work の試行と効果測定を実施し、エビデンスを積み重ねること、日本導入に向けた研修プログラムの開発に取り組んでいくことを課題としたい。

引用文献

伊藤順一郎、統合失調症の家族支援、精神

保健研究、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所、第 28 号、2015

佐藤郁哉、質的データ分析法、新曜社、2008
全国精神保健福祉会連合会、精神障害者の自立した地域生活を推進し家族が安心して生活できるようにするための効果的な家族支援等の在り方に関する調査研究 報告書、みんなねっと、2010

佐藤純、日本における精神障害者訪問家族支援技術の普及の可能性、京都ノートルダム女子大学研究紀要、第 46 号、2016

全国精神保健福祉会連合会ホームページ、英国メリデン版訪問家族支援プロジェクト、<http://seishinhoken.jp/meriden>、2016 年 6 月 26 日閲覧

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計 1 件)

佐藤純・大野美子・伊藤千尋、英国メリデン版訪問家族支援の日本導入に向けての有用性と課題、第 15 回日本精神保健福祉士学会学術集会、2016 年 6 月 17 日、山口県(下関市)

[その他(講演)](計 3 件)

伊藤千尋、本人と家族を共に支える家族支援、中国ブロック家族会精神保健福祉促進研修会 鳥取大会、2015 年 9 月 18 日、鳥取県(倉吉市)

伊藤千尋、本人と家族を共に支える家族支援、北海道・東北ブロック研修・精神保健福祉促進研修会、2014 年 9 月 1 日、青森県(青森市)

伊藤千尋、本人と家族を共に支える家族支援、栃木県精神保健福祉会中央大会、2014 年 7 月 23 日、栃木県(宇都宮市)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 千尋 (ITO, Chihiro)

淑徳大学・総合福祉学部・講師

研究者番号 : 50458410